

## 番外一 いのちの綱

—

むかしのはなしである

いまで言う中国の西の方。さほど人もなく、ざりと閑散かんさんともしてない、ごくごく普通の村の脇に、小さな森がある。

近くには小さいながらも川が流れ、魚や鳥の住処すまかとなつてはいるが、なぜか人影はない。

村の人々は昔から、この森を『門森もんじん』と呼んで密かに恐れていた。用もないのに森に入ると、その門から外へ飛ばされてしまふと言つのである。

いま、その門から一人の若者が出て来た。若者は、場所を確かめるかのように首を左右に振ると、村の方へと歩いて行った。

古びた家の軒先のきさきに、『茶』と書かれた小旗がぶる下がっている。なれた調子でそこへ入った若者は、開口かひこう一番、

「おいちゃん、いつもだね」

呼び掛けられた老人はくるりと後ろを向くと、箱の中から袋を取り出して、若者の前に差し出した。

「あいよ…しかしよく買うねえ。三日とあけずじゃないかい」

煤すすけた着物と対照的な、よく光る頭の老人。その顔は、ちよつとだけ困惑こんわくしたように見える。

「はは…まあ、よく飲む連中がそろつてるから」

笑いながら若者が言つ。年はまだ二十前だろうが、剣でも持たせたら似合いそうな引き締まった体つきは、寒さのために羽織はおっている毛皮を通してもよくわかる。

「まあ、飲んでうまいと思つうちが花だねえ。こつちは夏の照りが強かったせい、川の水が少なくなつ

たよ」

「そつか。それじゃ茶なんか飲めないね」

受け取った包みの回りを手でもてあそびながら、若者は考え込むような顔つきになった。真剣な顔と、子供っぽい手の動きが奇妙に映る。

「ははは。もともとわしらは茶は飲まないよ。あんたが買ってくれないと困っちゃうくらいだ…と、そんなこと言ったら、値切られちゃうかね」

そう言つて老人は笑つた。そもそも相手が値切るなど考えてもいない。

「大丈夫。おいちゃんとは、安くてうまいからみんな喜んでよ」

「そつかい、そりゃ嬉しいね。…ほい、おまけだ」

「あ、悪いね。じゃ、代はここに置いてくよ」

鑄物の銭を皿の上にちやりちやり、と置くと、若者は去つて行つた。

老人は数えもせず銭を懐に入れてると、皿をひよ

い、とひつくり返す。そこには、おまけしたはずの茶の代金が、一銭と違わずに置かれていた。

それを一枚、また一枚と拾い上げながら、老人は思はずつぶやいた。

「はあ。若いのに相当な頑固者だな、あの男は」

## 二

村を出て『門森』へ向かつた若者は、その一刻後には数百里ほど西の森にいた。

大きな森の西外れ、高い木々が、そこだけ抜き取つたかのようになくなつてゐる。あたりの丈の短い草は、まるでまあるい布団のよう。

そこに突然、彼は現れた。一瞬前には、何もなかったところに。

彼はぐいつと大きく伸びをすると、まわりを見回した。

見渡す限りの深い森。その一方だけに道が伸びて

### 3 番外一 いのちの綱

いる。彼はその道に沿って歩きはじめた。森の中心に向かつて。

道はまっすぐに伸びている。脇にはただ森があるばかり。だが、普通の森とは違う。鳥の鳴く声、虫の声。森特有の音、というものがない。ただ静けさだけが、耳に痛いほどしみてくる。

半刻ほど歩くと、正面に小さな門が見えた。門の上には『脱虎』の二文字。それを配した扁額が、二頭の虎の彫り物に背負われるようにかかっている。

彫刻は元は白虎のもりだったのだろう。白い塗りの物のあとが、その頭の部分にかすかに残っている。

「宗珀、入るよ」

若者はその虎に向かつて声をかけ、そのまま中へ入って行く。この門……『脱虎門』だからこれでも入れるが、森の東にある『招童門』ではこつはいかない。門を歩いてくぐっても、まだしはらく森が続く。門の手前と違うのは、森がいきいき見えること。

虫の鳴く声、鳥の声、草木の萌える命の声。

若者の顔が、ふと緩んだ。

暖かい緑の海に、小島のように建物がいくつも浮かんでいる。

彼はこの風景が好きだった。あたりの雰囲気を作り出しているものすべてが、自分たちの現実を忘れさせてくれる。

この森から一步外へ踏み出せば、そこは不毛の地なのだ……

彼らは衝派源流の術師である。

『光』と呼ばれるいのちそのものの力を基に、様々な『術』を編み出し、この世に害を為す宿敵『空王魔』を倒すため、日々修行に励む者たち——とでも言えば格好もつくのだが、実際には空魔の気に敏感すぎ、耐えられなくなった者たちが、寄り集まって身を護っているだけの自衛の集団にすぎない。

数百年前、術師たちは岩と砂しか見えないこの地に、強大な術をもって森を作り出した。

岩と小石の不毛の大地、そこに輝く緑の宝。

名は、緑宝寺と言う――

### 三

緑宝寺の朝は早い。

役目のある者の他は昼まで寝ていても咎められる

ことはないのだが、早起きが多い。

殊に早いのは、寺の中央やや南側にある、練光所

すなわち術の訓練場。

別に義務付けられているわけではないが、それなりの術を持てば磨きたくなるのが人情と言うもの。

このため、日によっては夜の明ける遥か前から人の気配がする。

そして、練光所から戻ってくる者たちの腹を満た

す厨房も早い。

本来、厨房の厨師は、主に女坊の女たちが当たっている。とはいえ、勝手に訓練している者たちのために、早朝から彼女たちを起こしておくわけにもいかないで、このときに限り、術師たちが自主的に交代で調理や片付けを行っている。

余談になるが、料理の後片付けに手を焼いた結果、ついに皿洗いの術を編み出した者がいる、というのが有名な伝説である。

…もつともこの術、現在までは伝わらなかったよのだが。

ここまで極端ではないにせよ、早起きはまだいる。朝露が抜け切らないうちに仕事をしなければならぬ者たちである。

緑宝寺北西部、みな陰で『狂草畑』とあだ名している小さな草畑。とはいえ、別に危険な草を育てて

5 番外一 いのちの綱

いる訳ではない。危険なのはむしろ、そこに出入りする者たちの方である。

「薬草が足りんなア」

草むらにしゃがみ込みながら、男が言った。年は四十に手が届くかどうか。濃い緑の袴はあたりの草に溶け込むよう。同じ色の布を首や手に巻き付けているので、よけいにその感が強い。

横で若い男が立ち上がった。そっくり返るほど大きく伸びをして、それでも足りずに「二、三度腰を叩いている。顔にはまだにきびが残り、細いがしつかりした体つき。」

「おやじさん、惚けたんスか？薬なら以前に決めたとおり、ちゃんと三日分あるじゃないスか」

歳とつた方の男はじろり、と睨みつけて、

「慶治、お前え俺達の役目舐めてんじやないだらうな？三日でなんもかんも片付くと思つたら大間違いだぞ」

この男、名前を寂という。蒼竜医呪と呼ばれる、

怪我や病気を治療する術を得意とする集団の長であり、緑宝寺内の医療関係すべてを取り仕切っている人物である。

とはいえ、緑宝寺内での彼の評価は、ただ一言「薬草気違い」であった。

「そら、そうスけど…」

寂はそれ以上言わず、脇から何か取り出すと、慶治の前に差し出した。片腕でやっと抱えられるほどの桶一つ。

「わあつてんならごちゃごちゃ言つな。ほれ、こいつに一杯、薬草摘んでこい」

「へーい」

あくびを含んだ若い声が、朝靄に響いた。

二刻後。桶いっぱい薬草を前に、寂はにたたと笑っていた。いくつか草を取り出しては、裏表を舐めるように眺めている。

とても四十近い男のやることには見えないが、慶治は「と言つより医呪者たちは―注意や説得のたぐいを、もう何年も前にあきらめていた。

さて、慶治は取っ手のついた小さな鍋なべで何やら煮ているようだ。

くつくつと鍋の中から聞こえる音にじつと耳を傾け、鍋を上げ下げしながら火加減ひかげんをとっている。

ほどなく、やわらかい香りが漂たなよってきた。

「おやじさん、できたスよ」

寂はちよつと残念そつな顔を見せたが、手に持っていた草を手早く小箱に分けて納めると、大きく腰を伸ばしながら慶治の方へやってきた。

「どうスか、この粥かゆ」

寂は鍋の中をじつと眺めていたが、指を一本突っ込んで、味見をする。その顔が苦々にくにくしく曲がった。

「…だあめた。薬ちからの効果落ちちまつてら。

いいか慶治、俺たちや怪我や病氣治すんが役目だ。この粥はたしかにうめえが、薬にならにや意味がねえ

んだよ」

目は真剣だが、箸はしが勝手に粥の中の薬草をさらっている。

「うーん、薬かア…」

困りきつた顔を見て、寂は心の中でうなずいた。こいつも、あとちよつとなんだがなあ…そう考えながらも、まだ箸は止まらない。

「まあ、うまいにやうまいんだ。食つてからまた考えろや」

人心地ひとしこぢつくつと、寂はすつ、と立ち上がった。そのまま畑の奥、森の近くへ向けて歩きだす。

慶治は慌あわてて近くの風呂敷ふろしきに皿やら鍋やらを放り込み、乱暴に包むと背中に背負しよつてその後を追った。

鬱蒼うつそうとした緑のそばに、なぜか皮膚ちほだの見えるところがある。二人はここで立ち止まった。寂が目配めくばせする。

「じゃ、はじめるか…言つとくが、今日でまる半年

7 番外一 いのちの綱

だぞ」

そう言いつつ、懐ふとんからなにかの種をひとつまみ取り出すと、目の前にわっつ、とばらまいた。

慶治は困ったように頬ほを掻かき、

「わあつてますよ。そうそう目覚まし鐘がわりになるもんですかイ

さあてと、そんじゃ一発……」

言いながら、禿はげた大地に向かって型を決める。目はざらりと輝き、目の前の土をねめつける。そしてそのまま、体をすつ、と落とすと、型を決めたままの手のひらを地面に押しつけた。

と、地面に時まかれた種が一斉にはじけた。埃ほこりのよつな根が、養え分さを求めて地へ潜ろうともがき、薄く蒼あい芽めがちよこつと顔をのぞかせる。

青年の顔が、子供のよう輝いた。思わず顔を上げ、寂さびの方かたをみやる。

「あ、待まちて……」

咄とつ嗟さにもれた男の言葉が、慶治に聞こえたかどうか

かはわからない。

四

ズンッ！

静かな森の中に、重い響きが伝わって行く。

寺の中央、中堂と呼ばれる建物の奥で、ふとんがゆつくりと持ち上がった。

「あはあ……もう、朝か」

響きの余韻よゐんが、まだ首の辺りに残っている。それを振り払うようにして、彼は起き上がった。

たらいに張つてある水で顔を洗い、絞つたふきんで寝汗をぬぐうと、いつもの服に着替える。

薄い緑の袴あひせにやはり薄い赤の帯。全体としてゆったりした……ある種しだらしない格好である。が、しかし足だけは、幅の狭い木綿の布でしっかりとこしらえている。

帯の背中に短剣一つ。柄の部分は鳥の動体のように飾られて、しかもつばと鞞の間は茶色のひもで固く結わえてある。

彼はおよそ実用的とは言えないこの剣の具合を確かめるかのように、何度か帯を結びなおすと、上から緑色をした薄手の羽織をはおった。

年の頃なら二十歳前後。慶治と大差のない年齢だが、歳に似合わない落ち着きがある。もっとも、これは役目柄、しかたのないことではあるが。

部屋の隅にある棚にすい、と近寄る。抽斗から筆と墨壺を取り出すと、壁にかかった数枚の板の中から「慶治」とあるのを選びだし、脇に書いてある数字に斜めの線を引いた。

この板をじつと見ながら、

「もう半年か…寂さんも大変だなあ」

とため息まじりにつぶやいて、しばらくぼおっと考えこんでいたが、腹が鳴ったので食堂へと向かった。

食堂へ向かう途中、女坊の脇を通った彼に声がかかる。

「あ、おはようございます、緑宝寺さま」

そう、彼はこの緑宝寺の長である。名前は空諾。術師の名前である『呪名』は三文字が普通で、一番上の文字は師の名前から取られる。これを師名と言つ。しかし、役目を負った者の場合、役名は師名の代わりと考えられている。

空諾の役名は『緑宝寺』である。『緑宝寺』の長の『緑宝寺』なのである。なんともややこしいが、伝統であるし、本人がこの名前を気に入っているので、何の問題もない。

「おや、お早いですね梨環さん」

振り返って、空諾が応える。相手はにこ、と笑った。あちこちに赤い房のついた白い袷に身を包んだ女性。しかし緑宝寺同様、足だけは動きやすくしてある。その服装に短めに切りそろえた髪、背の低さもあいまって、一見すると少女のように見える。し



9 番外一 いのちの綱

かし――

年齢は恐くて誰も訊けないが、三十五を過ぎていくことは間違いない。術師でもないのに、この化け方は驚異的であった。

「お食事でしたら、だれかに運ばせますのに……」

緑宝寺は声を出して笑った。

「はは、とんでもない。そんなことに彼女ら使っちゃいけませんよ。毎度言いますけど、女坊は術師のためにあるわけじゃないんですから」

それを聞いて梨環は困ったような、恥ずかしそうな表情になって、軽く頭を下げた。

彼女は、女坊の長なのである。女坊というのは空諾の言つとおり、術師とは直接関係はない。

十数代前の緑宝寺の時代、世の中で大規模な戦<sup>いくさ</sup>が起こつていたとき、その犠牲になり、行くところのなくなつた女子供を寺の中に避難させたのが、この女坊の始まりである。

彼女達は、家賃代りに寺のさまざまなことを手伝

い、あてができれば、世の中へ戻つて行く。…もつとも、そのときには、術師たちのことを忘れるような術をかけられるのだが。

「あ、そうそう、忘れるところでした。…申しわけないのですが、またお茶を買つて下さいませんか？」

梨環は手をひとつぽん、と叩くとそう言った。空諾はやや首を傾<sup>か</sup>げて、

「あれ？お茶なら二日前、宗<sup>そうほうく</sup>珀<sup>はく</sup>に買いに行つてもらつたばかりですが、もうなくなつたんですか」

女坊の長は口をへの字に曲げた。

「ええ。実は…あの、朝だけの厨<sup>ちゅうじ</sup>師<sup>し</sup>の方々が、火種<sup>ひたね</sup>と間違えて燃してしまつたらしいのですよ」

緑宝寺はおもわず頭を抱えた。

しかし、考えてみると無理もない。自分で茶を煎<sup>い</sup>れる空諾や女坊の女性たちはともかく、ほとんどの術師たちには茶の葉など縁遠いもの。まして、彼らの出身地の多くは北の地、茶を飲む習慣のないところなのである。

「わかりました。みんなには後で注意するとして、今日また宗珀をあの村に出しますよ」

梨環は深々と頭を下げて、そのまま立ち去るうとする。その後ろ姿に、空諾が声をかけた。

「あ、梨環さん…できたら、あの娘にも行くように、それとなく言ってもらえませんか？」

振り返った梨環は、やれやれといった表情で、

「ええ、私ももう帰ってもいいと思いますけど…私ではできれば、あの娘の方から『帰りたい』って言うて欲しいですわ」

いままでとは違う、有無を言わさない口調。緑宝寺は苦笑しながら少しうつむいて、頭を掻いた。

「そうですか…すみませんね。いまの話は、聞かなかったことにして下さい」

梨環はそれを聞くとにこ、と少女のように微笑んで、今度こそその場を去った。

歩きながら、考えがひとりでに口に出る。

「術師たちを見守るのでさえ大変でしょうに、女坊

のことまで気にしているなんて…

あの方が緑宝寺でよかったわ。本当に」

## 五

昼過ぎ、中堂から宗珀が出て来た。手には麻布のさいふを持ち、当惑したような表情で、脱虎門の方へ歩いて行く。その背中に声がかかった。

「あ、宗珀さん」

振り返ると、娘がひとり立っていた。

薄い緋色の一枚布を頭からすっぽりかぶり、腰紐で結んだ西国の着物。茶がかった髪は長いけれど、まっすぐ垂らしても腰に届かない。それもそのはずで、背丈は宗珀にも負けないくらいある。

「なんだ、芳ちゃんか」

芳里、というのがこの娘の名前である。

二年ほど前、宗珀が初めて茶の買い出しに門森のある村まで行ったとき、一緒に緑宝寺までついて来

11 番外一 いのちの綱

てしまつた娘。その後、事情を聞いた女坊の長が緑宝寺に相談して、女坊に置くことになつた。

「『ちゃん』はよしてください。…ええと、またあのお勤めですか？」

口を尖らせた娘を、宗珀は笑つて見つめた。

「ん？ああ、そうだね。わかつてるよ、なにか持つていけて言つのかい」

「ええ、このお花……」

芳里は懐から、李の花を一輪、取り出した。

いま世の中は冬だが、緑宝寺の中では、その気になれば梅だろつが梨だろつが、何でも咲かせることが出来る。もちろん、植えればぼん、と咲くわけはない。丹念たんねんに世話してやるが大前提である。「あのおいちゃんにはもつたいたない花だな。ま、いや。じゃいつものように活けておくよ」

本当は、きみが行つた方がいいんだろつけどな」

「しかたないわ。あたしは……」

そう言つてうつむく芳の頬に、宗珀の手がそつと

触れた。その部分がさつと紅あかく変わる。

と、いきなりその手に力が加わつた。

にゅつ、といつ音とともに顔が變形する。

芳は両手を振り上げた。

「なにするのよ！」

膨ふくれたその顔に向かつて指をさし、笑いながら、宗珀は森へ去つて行つた。

その後ろ姿を見ながら芳がつぶやく。

「ごめんね。ありがと、宗くん」

六

宗珀が緑宝寺を出て十数刻、日も西に傾きつつある時分しぶん。中堂の奥、緑宝寺の私室には、主あその他にも一人いた。

「最近、源流以外の者が増えているようですが」

椅子に腰掛けているとはいえ、微動びどうだにしないその姿が、性格をよく物語っている。

体格はいいとは言えないが、さりとて細すぎもしいない。身体にびったりと張り付くような服装。首の辺りまで伸ばし、首元で固くしばった髪。どれをとっても、なによりも動きやすさを考えた格好である。

名前は朱崩しゅほう。つい最近、十八になったばかり。術師としての能力は誰もが認めるところではあるが、悪い意味で若い、というのが大方おおがたの評価である。

彼は、緑宝寺を睨にらむような目で見据みすえながら話していた。

「うん。近々、武術の指導をして下さる方もお呼びするつもりだよ」

空諾の方は、平然とその目を見返している。…が、実のところ、内心はそう平静でもない。

「ぶ、武術の師!？」

朱崩の身体がようやく動いた。緑宝寺はただこくり、と肯うづく。

「聆た譜んさんという方なだけどね。泉せん碓たや岳が生くさんと付き合いがあるらしいから、術師のことをある程

度知さっているし、皇帝陛下さいみんからの再三しよんざんの招しよ併ういに疲つかれているとも聞きいているよ。だから気の合あいそうな人を出せば、来てくれるんじゃないかと思うんだ」

今度、朱崩の身体は動かなかったが、顔色は明らかに変わっていた。

「武術…術師にそのようなものが必要だとは思えません。まあ、やりたい者がやるのは勝手ですが…」

「いや、そんなことはないよ」

空諾は、長くなりそうな朱崩の言葉を、無理矢理に断ち切った。

「だいたい『武形呪ぶけいじゆ』なんかは、武術を身につけていないとできないだろう?。」

朱崩の顔が紅潮こうしよした。

「あれは粗野そやな剛流こうりゆうの術です。源流と一緒にしないで下さい!!」

『武形呪』というのは、武術の型を途中で止め、その後の動作を『光』によって成なし遂とげるものである。

13 番外一 いのちの綱

武術と術の素養そようがあれば、比較的簡単に、強烈な効果が得られる。

源流ではさほど盛んとは言えないが、朱崩の言うとおり、同じ衝派でもすでに滅んだと言われる剛流きよくゆうや極流きよくゆうで、多く使われていた。

「剛流だって、術流派であることに変わりはないよ。そもそも衝派の術は、古代衝派の時代から周囲のよい術、よい考えを吸収しながら発展させていったものだよ。」

もちろん源流の術に優れている点は多くあるけど、それは後からできたから、先人の流派のよいところを集めたから、という部分が大きいと思うよ。それなら、今後もよいところを取り入れて行けばいいさ。剛流のよいところは吸い尽くした、なんて奢おごっちゃいけないよ。」

「だんつ、と大きな音が部屋中に響く。朱崩が机を拳こぶしで叩いたのだ。」

「それは違います！源流はたしかに他流を見ていたかもしれませんが、決して取り入れたわけではありません。ただ、他流を見ることによって、源流の本質を突き詰めて行っただけです。」

「それが『粹流すいりゅう』というものです!!」  
緑宝寺は頭が痛かった。

「術師は他流派と交わらず、より純粹である方が強い」と主張する、いわゆる『粹流説』の信奉者であった師を半年ほど前に亡くし、その後継者たらんとしている彼の気持ちはわからなくもない。

だが、こうまでなると……

「そもそも今回のような混乱を招いたもとは、まず他流の者を総師範そうしはんと仰おほいだことに始まります。そのため、われらは貴重な術師たちを失い、先の空魔との戦いに大敗するに至り……」

『総師範』のくだりで、空諾の眉がぴくりと動いたが、朱崩はそれに気付かなかった。

緑宝寺は流れるような相手の口調を今度は手で制

すと、口を挟む。

「気持ちにはわからないでもないけどね、朱崩。

それでいくと、私が緑宝寺でいるのもおかしくはないかい？」

空諾は先の緑宝寺、影焼えいしょうに拾われ、わずか数年で緑宝寺代行になった。たしかに、朱崩の言う純粹じゆんじゆんの源流術師とは、ちよつと違つ。

「それは…それは、以前はどうあれ、あなたが十分に源流の者になつたと認められたからです。他流の者をそのままに入れるのとはわけが違います」

「他流はまずいのかい」

空諾は自分の口調くちやうに皮肉を混ぜないように苦労していた。けれど朱崩の一言は、その苦勞を無残にも打ち砕いてしまつた。

「当たり前です。衝派源流にかなう流派など、この世にありません！」

緑宝寺の顔は、もはや内面の思いをそのまま出す

ほかなくなつていた。

と、そこへ表から声がかつた。

「宗珀そうはく、ただいま戻りました」

渡りに船とばかりに、空諾が扉に飛び付く。

開いた扉の向こうに見える緑宝寺の表情に、宗珀は面食めんくらつてしまった。なにせこの仕事は幾度いくどとなく勤めて来たが、ここまで歓迎されたことはない。

彼は困惑しながら、それでもいつもの習性に従つて、茶の包みを手渡していた。

「ごくろうさま。さ、まず一杯目は君だ」

言いながら空あいている席へ座らせる。その隣では朱崩が、わけがわからないといった表情で、成り行きを見守っている。

緑宝寺は部屋の奥まで跳はねるように進むと、今まで暖めていた急須きゅうすに、いま受け取つた袋から一つまみほど茶をすくい取り、入れる。その隣ですでに用意されていた湯を注ぎ、やはり暖めていた湯飲みに

注いで背後の席へ。

次々と、まさに流れるように動いて行くその手さばきは、まるで舞っているかのようだった。

「さ、冷めないうちに……」

はっ、と我にかえる。うかつなことに、二人とも目の前に湯飲みが出て来たことにさえ気がなかつたのである。

宗珀は、空諾の再三の勧めに湯飲みを手に取るうとして、妙なことに気がついた。

水面が、揺れている。

「??」

再び手に取るうとしたその体が、いきなり押し上げられた。

「なんだ!?!」

あわてて二人を見る。自分と同じく、椅子にしがみついているところを見ると、これは自分だけのことではないらしい。目を閉じ、とにかく落ち着け、と

思う。

ときおりばたん、ばたんという音がする。どうも中堂の大扉が開いたり閉まったりしているようだ。してみると、これは横に揺れているのだろうか？

その疑問は目を開ければ解けた。自分の身体は椅子ごと前後左右にずりずりと動き回っていたのである。

宗珀はそのまま素早く左右を見た。空諾はもとより、朱崩もそれなりの術師である。この揺れの中で、いや揺れているからこそ、じっと身を守りながら鋭い目つきであたりをつかがっている。

そして揺れは、はた、と止んだ。

「誰だ、今のは？」

空諾が思わずつぶやく。

術師の常識からすれば、誰かがまた、術を失敗したと考えるのが当然であった。

そこへ、黒つばい珠を抱えた十四、五の少年が駆け込んで来た。

「緑宝寺さま、辰台しんたいより伝令！」

いまの揺れは、地震です。術じやありません。周囲の光に、特に変わった動きなし!!」

ほつ、とした空気が、あたりに流れた。

各々おののおのが強大な力を持った術師の集団だけに、訓練に失敗したときの被害は相当なものになる。

非常時の集会場であり、普段は使いもしない中堂が、緑宝寺の中央にでん、とあるのは、万一のとき壁になるためでもあった。

「ごくろうさま貞視ていし。で、地震とすると、源みなもとはどこあたりだい?」

「はい。観辰かんしんからすると、緑宝寺の東、およそ二百(注)五十里」

空諾の笑みをたたえた顔から、眉だけががびく、と跳ねた。

「東、二百五十里?」

そう言いながら、後ろ手でなにかを掴むと机に広

げ、顔を埋める。緑宝寺こくほうじでは珍しい、紙に描かれたそれは、地図であった。

三人が注目する中、指を広げて距離を測ること半刻ほど。がば、と上げたその顔は、その場の全員を震え上がらせるに十分だった。

「あの村の……真下だ!!」

## 七

夕暮れの緑宝寺。あたりの木々が夕日に染まって、刻々とその色を変えてゆく。

ここで暮らす者たちの多くが好む、こののどかな風景…しかし、今日はかりは違っていた。風景を引き裂く音が、辺りにこだまする。

カン、カン、カン、ドン

カン、カン、カン、ドン

高い鐘の音が三つ、低い太鼓の音が一つ。非常招集の合図である。女坊にょぼうの女性たちと、医坊の医呪師



17 番外一 いのちの綱

範たちを除く全員が中堂へと駆け寄る。

最高師範とそれに準ずる者たちは、中堂の奥にある一室へと集まる。

緑宝寺全体が、一気に動きだした。

「お揃いですな」

中堂の奥、奥堂と呼ばれる小部屋に最後に入って来たのは、医呪師範の長である寂だった。

「遅いよ寂さん」

一番奥にいる緑宝寺のとなり、倒魔術師の長が口を尖らせた。

衝派源流の術師は、本来の敵である『空魔』との戦いで役割により、大きく三つに分けられる。

まず、異なる世にいる空魔を、むりやりこの世に引きずり出す握魔術師。

出て来た空魔を討ち倒す倒魔術師

そして、討ちもらしたときに元の世に封じ込める

封魔術師。

いまここに集まったのは、それらの長と女坊の長である梨環。そして、彼らとは独立して行動する医呪の長、寂である。

「こりゃ失礼。ところで緑宝寺、医呪法師十二名、全員準備を終えております。薬草も申し分なし！」

空諾はため息をついた。

「せめて遅れるとが、伝令出して下さいよ…まあ、ご苦労さま」

それだけ言うと、視線を全員に移す。

「あの村のことは今更言うまでもないでしょう。」

いま、二人ほど様子を見に行ってもらっています。が、被害の度合にかかわらず、救援に向かいます。

まず仙跳さん

は、と握魔術師の長が答える。

「村の出入口に跳結界を張って、外から入れないようにして下さい。それから浄芥さんと杯代さん」

倒魔術師と封魔術師の長たちが同時に返事をした。

「風乗りだけをまとめて、一団を編成して下さい。そして、好きなものを十分に食べておくようにと。おそらく彼らが最も疲れることになるでしょうから。」

厨師たちにはその旨、お願いしますよ。」

最後の部分は梨環に向かつて言った。彼女は黙ってうなずく。

「寂さんは医呪師たちを、まず半分送って下さい。先々の状況がわかったら伝令を。必要なものを持たせて、残りの半分を行かせましょう。」

寂は大きく二三度うなずいた。

「わかった。おい浄芥。風乗りの長、誰にする？」

「ん、猪虚あたりがいいんじゃないかな…。」

ちら、と林岱を見る。視線の先であごが大きく引かれた。

「よっしゃ、じゃわしやそつちへ。」

「あ、寂さん。衝旗は朱崩に任せますから、従って下さいよ。」

医呪の長は、背を向けたまま手を振ると立ち去った。

「緑宝寺、朱崩に衝旗を…指揮を任せる、っていうのは？」

全員が、まさか、という顔で見つめている。緑宝寺はややためらいぎみに、

「うん。だめかな？」

他の者の視線を受けて、仙跳が言った。

「力が無いとは言いませんが、あの『粹流』狂いで大丈夫でしょうか？」

空諾は、妙にほっとしたような笑みを見せた。そして、他の者たちが不思議そうに眺める中、はつきりと言つ。

「だから選んだんだ。大丈夫、万が一のことは考えているから。」

## 八

中堂には人が詰め掛けていた。

総勢八十二名の術師たちとその長、そして女坊の長。術師たちはいずれも、木綿の衣服と覆面をつけてずらりと並んでいる。

部屋の大きさに比べれば大人数とは言えないが、緊張した雰囲気のか、やけに狭く感じられる。

「…被害の概要はいま聞いたとおり、予想外にひどい中堂の中、一段高い台に乗って緑宝寺が話している。隅の方では、いま村から戻って来たばかりの風乗りが二人、医呪法師の手当を受けながら、医呪の長に村の怪我人たちの状況を話している。

「朱崩!!」

はい、と軽くうなずきながら蒼の覆面をつけた男が前に出た。

「衝旗は、きみに任せる。まず住人の無事、次に住居の無事だ。順番を間違えるなよ」

隠しから取り出した、蒼い小旗を覆面の耳の当たりにさす。朱崩は礼をとると、一步退いた。

空諾は、術師たちをひとりひとり点検するように

見つめながら、

「術は『滅呪』を除きすべて許可する。

また、どうしても必要とあれば、『滅呪』の許可も辞さないつもりでいる」

静かだった中堂がざわついた。『滅呪』は術の中でも空魔以外には使ってはならない、と代々の緑宝寺によってきめられて来たもの。その決まりを、緑宝寺自らが『破つてもよい』と言っているのである。驚くのも無理はない。

空諾はざわめきを手で制した。

「緑宝寺は、私と、最高師範位が守る。できる限りの手をつくし、あの村を……救ってくれ!」

おう!と全員が叫び、朱崩に続いてはたはたと中堂を後にした。

人気がなくなった中堂で、緑宝寺はふう、と息を吐いた。

目は正面の大扉を見るともなしに見つめ、やや肩

を落としてじつとその場に立っていた。

(やはり向いてないな…命令なんて——)

ぼつと考えているその背後から声がかかる。

「緑宝寺さま、私たちは…厨師の他に指示がありませんが？」

梨環だった。空諾はびっくりして振り返ると、早口で応える。

「ああ、そつでした。とにかくこはんを沢山作たくまつておいて下さい。みんな忙しくなるから、厨師だけじゃ足りないだろうし」

はい、とひとつ返事を残して、女坊の長が去っていった。

女坊の隅々に明かりがとまり、どたどたという足音とともに、湯気ゆげと醤油しょうゆの匂いが立ち昇る。緑宝寺全体が、なんとなく暖かく感じられるほどの熱気である。

その雰囲気を五感すべてに感じながら、緑宝寺は不意に自分の頭を叩いた。そして、今度は真剣な面持おもて

ちで奥堂へ戻って行った。

## 九

『脱虎門』を出てしばらく進み、おもむろに道を外れて森の中へ入る。

やや広くなっているところで、風乗りたちが待っていた。

「でも変だなあ。たかが辺鄙な村一つのこととで、『滅呪』まで使うかもしれないなんて」

「たしか、あそこは茶の仕入れ先だろ？ まさかたあ思つが、茶を守るために行かされるんじゃないだろうなあ…」

背後から聞こえる軽い口調に、朱崩しゅぼうがため息をついた。

風乗りたちにも聞こえていたらしく、やれやれといった表情で相手を見ている。

「茶がなくなつて困る奴なら、まあ何人かはいるだ

21 番外一 いのちの綱

るうけど…」

風乗りの準備をしながら、宗珀そうはくが口を開いた。

「あそこにはね、緑宝寺りくたうじに直接通じる風路ふうろがあるんだよ」

風路。読んで字のごとく、風の路みちである。

「ここでいう『風』はただの風ではない。この世を幾重いくえにも取り巻いて流れる、風光ふうこうと呼ばれるものである。術師のうち『風乗り』はこの風に乗って、数百、数千里の彼方かなたまであつという間に飛んで行ってしまう。」

……と、こう言ってしまうと便利に思える『風』だが、実は一つ欠点がある。『風の流れに乗る』ということは、裏をかえせば『風の流れないところへは行けない』ということなのだ。

風は日々その流れを変える。しかし、ごくまれに流れを変えない風がある。これが、『風路』なのである。

「なるほど…逃げ道ですか」

答えたのは、先ほど軽く言っていた男らしい。

緑宝寺は岩だらけの土地に作り出された縁とての砦とりでである。万が一襲われたなら、そして万々が一追いつ返せなければ、逃げる場所などありはしない。

朱崩はぐつとうなずく。宗珀の手を取り、風に乗る準備を整えながら

「そういうことだ。あの村は、我々のいのちの綱なんだ…」

十

三人の風乗りに囲まれながら、一度に十数人が風に乗って行く。

風の中…色のない世界がふ、と終わりを告げると、そこもやはり森であった。

ただし、雰囲気は一変している。

暑い。明るい。冬の夜だというのに。

火災が起きているのに違いなかった。

後からあらわれた者たちと共に、村へと向かう。朱崩の覆面の下では、汗が一つ流れていた。

目の前は、まさに惨状さいじょうと言ってよかった。

炎はもちろんのこと、それ以前に家に潰されてもがく人、もがくことさえできない人。それを免れても、この寒空の下に薄着で震えている人…

茫然ぼうぜんとする朱崩の脇から、寂が飛び出した。

「うおし、かかるぞ。」

ちぎれてるやつやはぜてるやつあ、とりあえずつなげ！

臍物モツやられてるやつあこつち奇越よこせ。慶治けいじ、お前まへは菓粥くすりかゆ、急げよ!!」

白い衣装に白覆面の一団が動きだす。そこから中から怪我けが人や、それよりひどい人を背負い、あるいはちぎれた体の一部を拾い集め、村はずれの広い空き地で治療をはじめた。

ここで朱崩はようやく我にかえった。集まった術

師たちを三つに分け、消火、崩れた家の撤去、そして巻き込まれた人達の避難誘導を命じると、腕組みをしてあたりを睨にらみつけた。

もともと、この種の仕事は好みではない。術をふるって、動き回る方が自分には合っているのだ、と思う。だが、頭の旗はたがそれを許さない。

やや苛立いらだちながら立っているその裾すそが、ぐい、と引かれた。見ると腰に届かないほどの小さな女の子が、全身の力を込めて足を揺ゆするうとしている。

（なんだ、こいつは？）と思いつつ、その視線まで頭を下げると、今度は頭に抱きつきながら叫んだ。

「おかあさん！」

朱崩はわけがわからず、ただ目を丸くした。

「おかあさん、助けて!!」

ここで初めて、彼はその意味を把握はあくした。なおもしがみつく女の子を抱いて、すつくと立ち上がると、その顔を逆に向ける。

「見て見る。私の仲間がみんなを助けている。きみ

の母親も、きつと助かる」

静かで、自信に満ちたその声を聞くと、女の子の叫びはやんだ。

「おおい、庶宜！」

朱崩の声に、村人の避難にあたっていた術師の一人がやってきた。朱崩は女の子をひよい、と持ち上げて、

「この子の親がないそうだ。探してくれ」

庶宜は黙って女の子をじつと見ていたが、ひとつうなずくと、瓦礫の山へと向かって行った。

朱崩は女の子を肩に乗せ、再び炎を凝視している。子供は身体を倒し、覆面の中の目を覗き込むようにじつと見た。

「おじちゃん、だあれ」

朱崩の目が一瞬和む。軽く目をつむり、再び開いたその眼は、湖水のように透き通っていた。

「関係ない。…けど、この村は必ず救ってやる。必ず！」

村は中に入るほど被害が増していた。家の撤去を命じられた術師たちは、その中心の家二、三軒に人がいないことを確認すると、光雷破などの破壊術を使って更地にする。そして、周辺の家の屋根や柱を、順番にそこへ集めて行った。

集める方法は人それぞれで、風に乗って走り回る者がいるかと思えば、壊れすぎないように部分的に結界で覆っておいて、雷撃呪法を打ち込むといった荒っぽい者もいた。

見る間に減って行く潰れた家と、見る見る膨れ上がる瓦礫の山の影を、村人搜索の一団が走り回る。彼らは、ときおり立ち止まって目をつむり、耳を澄ませるようになっていた。

『光』のうち、人がそれぞれ中に持っている『内光』を探しているのである。もちろん、たまには犬やネズミのもつそれと勘違いをすることもあるが、少

なくともこの搜索で、『生き物があるかどうか』だけははっきりする。

搜索に当たった術師の多くは潰れた家の回りをくまなく探していたが、彼、庶宜だけは別の場所へ向かっていた。別に、根拠があるわけではない。ただ、こちらを先に調べなければまずい、と考えたから。すなわち、轟炎の中である。

手をぐいと伸ばしながら、左へ、右へと動かしてゆく。その手が、ふと止まった。燃え盛る火の方へ一步、二歩と歩き、大きくうなずくと、そのまま朱崩の許へと駆け戻った。

「朱崩、炎の中に一人いるぞ！」

朱崩の顔がこわばる。覆面の上からもわかるほどに。間違いない。この子に近い光…この子の親だ!!」  
肩の重みが動いた。

「おかあさん!!」

腕を伸ばし、火の中にいるなにかをつかむように

する子供を、ぐつと引き寄せると、まわりを見回して思い切り怒鳴った。

「宗珀、いるか!!」

青い衣がふわりと目の前にやってくる。左手に水の入った瓶を持って。

「呼んだ？ 悪いけど、いま忙し…」

朱崩は鋭い視線で言葉尻を抑えつつ、子供を肩から降ろした。そして、まっすぐ腕を上げる。

「あの中へ飛ばしてくれ」

指さす先は、轟炎の中心。

「お、おい、正気か？」

「いいから早く！ 人ひとり死ぬかもしれない!!」

宗珀は、瓶の中身を黙ってぶちまけた。朱崩の頭から腰にかけて、ずしりと重くなる。

「わかった。俺が行くまで、生きてるよ」

言いながら朱崩の腕をとり、炎の中心を睨みつける。相手が返事をする前に、その姿は消えていた。



瞬まはたき一つの間に、景色は一変していた。見えるのはただ炎。覆面に染み込んだ水が、あつと言つ間に湯気へと化してゆく。

(どこだ?)

口を開くことはできない。それほど猛火もっかなのである。人が生きている、ということが不思議でならない。

(いや、まてよ)

目をつむり、考える。崩れた家。押し寄せる炎。辺りに水はない。その中で生き残れる場所は…?

「土の中か!」

思わず口を開いた。覆面越しとはいえ、熱い風を喰くらった喉のどが燃え上がり、なんとか冷やそうと咳せきをする。そのまま地面に突つ伏すと、目の前に井戸のようなものが見えた。咳き込みながら、そのなかを覗のぞきこむ。

浅い。大人の背丈せたいけより少し深いくらいの井戸の底

で、焦げた布が動いた。

(人か?)

思うが早い、朱崩はさつと飛び降りると、それを抱きかかえた。顔らしき部分の布を剥ぐと、出て来たのはあの女の子に似た女性の顔だった。

一つ大きくうなずくと、女性を抱きかかえたまま、朱崩は印を決めた。

「絶崩!!」

叫ぶと同時に足元が地の底へと崩れてゆく。周囲には土が舞い上がり、炎に焼かれて落ちてゆく。そのさまは、まるで溶岩が吹き出すかのようだった。

と、その途端とたん、耳でなく、体に突き刺さるような声を感じた。

「つかまれ!」

同時に、目の前に手だけがにゅつと現われる。朱崩が印を解いた手でさつと握ると、抱えていた女性の重さがなくなった。だが彼は油断しない。次の瞬間、再びどっしりとした重みを感じると同時に、幼

「目が正面にあった。」

「おかあさんだ。間に合ったぞ！」

## 十二

朱崩がもとの、村を一望できる場所に居るころには、壊れた家の撤去も半分ほど終わっていた。

しかし、まったく解決していない問題もあった。火である。

「だめです。勢いが強すぎる！」

「水がないのか。くそっ!!」

最大の誤算は、水の少なさにあった。川が近くに  
あるため、すぐにでも使えると思ったのが大きな間  
違いだっただのだ。

「破呪で吹き飛ばして……」

誰かが言った言葉に、朱崩はすぐ反応した。

「よせ！火の粉が飛ぶだけだ!!」

……とりあえず、回りの家を結界で覆って、燃え広が

るのを防ごうとはしているものの、火だけを避けて  
すべて包むというのは難しい。だいたい、あの『門森』  
などは隠しようがない。

「くそっ！これだけ術師がいて、火一つ消せないの  
か！」

地に打ちつけた朱崩の拳が、その場にいた術師た  
ちすべての気持ちいを代弁していた。

## 十三

一方、医呪師たちが治療している広場。

薬粥を作り終えた慶治が、病人たちに配ろうと入  
れ物を探していると、寂の姿が目に入った。

額に手を当てながら、しきりに考えこんでいる。

「どうかしたんスか？」

医呪の長はちよつと振り向くと、また元に戻った。

「いや、さっき朱崩から預かった怪我人なんだがなあ  
たしかに火傷もあるけど、もとからある病気の方が

ひでえみてえだ。診ろよ、この脈」

慶治は細い腕を軽く握り、目をつむった。

「はあ、なるほど。精気が弱ってるんすね。ンなら『増光』かけてやれば…」

寂はやれやれ、と頭を振った。

「だからお前は気が短えってんだよ。

精気は光から生まれっけど、すぐってわけにやいかねえ。弱った体に『増光呪』かけんなあ、こりゃ最後の手だ。ヘタすりゃ、光が増す前に体がはちきれちまう」

言いながら、慶治の薬粥に指を突っ込み、

「こつこつときによ、薬草が一番なんだが…これじゃあなあ」

慶治はちよつとムツとして、なかば怒鳴るように言った。

「なら、練精呪スー！」

練精呪。光を精気に転化する術。人に使えば病氣

の身体に精気を与え、花に使えば、種から一瞬にして花を咲かせる術である。しかし――

「慶治、おめえ命いくつ潰したかわあってんのか？俺たちやこのひとたちのいのちの綱なんだぜ」

寂は怒鳴らなかつた。ただ淡々としたその声に、青年はぐつ、とつまつた。だが、拳を握り締めてすつくと立ち上がる。

「この人は、訓練のための種じゃないス。俺の患者なんス。俺の患者は、俺が治すんです!!」

寂はちよつとだけ黙つた。ふと眼光がゆるむ。それを隠すようにくるりと後ろを向き、

「最後まで氣イ抜くな。

それさえ無きや、おめえは衝派最高の医呪師だ」

一言残すと、薬粥の鍋を持って立ち去っていった。

「こちらは宗珀。緑宝寺からの人員運びも一段落したので、個人的な探し物をしている。」

「あの茶屋は、たしかこのあたり…」

誰に言つともなしに口にしながら歩いていけると、その目に、文字をひとつ染め抜いた緋色の布が飛び込んで来た。

鮮やかな「茶」の一文字。

宗珀は真っ青になつて『風』に飛び乗る。

並みの風乗りにはとつてい乗れない、低空をゆく風。風は低く流れるものほど、流れが遅い。しかしすぐに落ちてしまうという欠点がある。

その風に乗りながらさらに印を決める。灰色の間の一部がすうと開き、あたりの様子を映しだす。

折れた柱が迫つて来て、ぶつかると思える瞬間にわけのわからないものになる。そしてすぐにまた目の前が広がる。柱を通り抜けたのである。

木でも土でも鋼でも、風にとつて、そして風に乗っているものにとつては竿の目よなもの。その理屈をわかつている者などいやしない。もちろん、宗珀も例外ではない。ただそういうものだと感じるのみである。

藁の屋根を突き抜けて上へと向かう風から、また別の風に乗リ換えて再び家へ戻る。

(いた！)

瞬時にすべての術を解く。勢いあまつて老人から二丈ほど離れてしまった。これほど短い距離では、さすがに風は使えない。やむを得ず崩れた柱の間を這いずつて、ようやくたどり着いた。

身体を抱きかかえると、ぬるつ、とした感覚があった。確かめるまでもない。血である。

あわてて老人の首筋に手をあてる。脈は…ある。

口元に手をかざす。息も…ある。

ほっとしたものの、事態は急を要する。抱きかか

えてそのまま風に乗ろうとする…が、できない。さつきまであれほど吹いていた風が、びたり、止まってしまっていた。

「くそっ」

思わず悪態をつく。すると腕の中がもぞもぞと動きはじめた。

「だいじょぶか、おいちゃん」

「お、おお。誰だい、あんた？」

ふ、と目がゆるむ。風を感じたのだ。外へ向けて吹く、高く、強い風。

「気をしっかり持ってくれよ。これから、外へ飛ぶからな」

「とぶって…？」

言いおわるより早く、あたりは灰色につつまれた。

十五

「うわっ」

寂がこんな声を上げるのは珍しいが無理もない。目の前にいきなり、人が落ちて来たのだから。

ひと呼吸すると、思い切り怒鳴る。

「バカヤロウ！ 怪我人の中に降ってくるたあ、どういっつもりだ!!」

「運ぶ手間あ、省いただけですよ。寂しい」

抱きかかえた老人を庇って打った首筋をさすりながら、宗珀が応えた。

「はい、一人追加です」

宗珀は老人をその場に寝かせた。

寂はざっと外傷を見て、すぐに術をかける。見る間に傷が塞がり、出血も止まった。だが…

「血が…足りねえ」

彼の切羽詰まった言葉に、回りの者たちがぎょっとした目を向ける。

「血…って、寂しい、そんなもん生きてりゃいくらでも増やせるんじゃ…」

医呪の長は、患者から目を離さない。顔は真剣そ

のもので、泣きそつにさえ見える。

「ああ、『増光』や『練精』使やたしかに血も増えんだけど、それまで待つてらんねえ」

宗珀の顔から、血の気が引いた。口元が震えている。

「いや、手が無えわけじゃねえんだ。手っ取り早いなあ、他の血い混ぜちまうつてんだが…」

「他の血でいいのか。なら、俺のくれてやる！」

以前に<sup>まえ</sup>瀧みたいに血を流したことだつてあるんだ。

じいさんの一人分ぐらいなら、どつつてこた…」

目の端に涙がにじんでいる。寂はその肩を抱<sup>かか</sup>える

ようにして言葉を止めてやった。

「嬉しいけど、ちと無理だな。へたすつと血が固まっ

ちまって即、死んじまう。たまにうまくいくなあ、親

子とか兄弟とか、身内の場合だけだ」

ふと、宗珀は黙り込んだ。

「…寂じい、おっちゃんほどのくらい持ちますか」

「ん？うーん、俺がかかりきりになって…それでも

六刻もつかどうか、つてとこだな」

風乗りは小さくうなずくと、くるりと後ろを向いた。

「わかりました。じゃ、その『血い混ぜる』準備、お願いします」

「おいおい、聞いてなかったのか？あれは身内でないきゃ…」

一瞬見えた、その目の色に驚いて、医呪師の長の声<sup>こゝろ</sup>が上擦<sup>あ</sup>つた。宗珀は逆に淡々と、

「だから、身内を連れてくるんですよ」

言つたり、その姿は空へ溶けて行つた。

朱崩はまだ炎を睨<sup>にら</sup>みつけている。

家の片付けの方が終わつて来たので、手の空<sup>あ</sup>いて

いる術師が交代で結界を張り、延焼を防いで消えるのを待つ策<sup>さ</sup>を採<sup>と</sup>つたのである。

しかし、火はなかなかおさまりそつに見えない。そ

の場の誰も、苛<sup>いら</sup>立つていた。

その朱崩の脇に、いきなり人が現れた。そのまま、

門森の方へ駆け出して行く。

「お、おい宗珀、どこへ行くつもりだ？」

「緑宝寺へ戻る！人ひとり死ぬかも、しねない!!」

朱崩はその場であっけにとられていたが、風乗りたちをまとめている猪虚の毒づく声に、はっと我をとりもどした。

なかば灰になっている覆面をなおしながら、また炎の方へ目をやる。もう、睨んではいなかった。

十六

門森から緑宝寺までを一息でこなし、脱虎門をくぐった宗珀は、目的地へ向けてひた走った。

目的地は、女坊である。

だが、そこまで行く必要はなかった。

「どうしたの、宗く…いえ、宗珀さん」

炊き出し用の大皿を抱えた芳里が、厨房へ向かう途中だったのだ。

「いいところに！さ、村まで来てくれ!!」

宗珀は乱暴に腕を掴むと、そのまま風に乗ろうとする。

「おいおいどうした、宗珀。こんなところで…」

中堂の脇から、緑宝寺が顔を覗かせていた。

緑宝寺内で、風乗りは通常禁止である。宗珀は握った腕をぱつと離して、

「宗珀、衝派術師としてではなく、芳里の友として、緑宝寺どのにお願い申し上げます！」

いまは非常時である。非常時だからこそ、この言葉に空諾ははつとなつた。

足早に近づくと、宗珀に話をうながす。

彼は、茶屋の主人のことを手短に話した。話が終わる前に、芳里が頭を抱えてうずくまる。

「お爺様が!?!」

そう、彼女は茶屋の孫娘なのである。

「お爺様が…でも、あたしは…」

宗珀は、芳里の両肩を掴んで立たせようとした。だ

が、彼女はその手を思い切り振り払う。

宗珀はついに怒鳴った。

「売られるのがいやで、逃げて来たっていうのは知ってるよ。そのせいで、芳ちゃんのご両親が重労働しなきゃならなくなつて、死んじゃつたっていうのもね！」

でも、それならなおさら、お爺さん助けなきゃ！

これ以上、逃げてどうするんだよ!!」

芳里は、耳を押さえていた両手をゆっくり離した。

「どうしても嫌だ、っていうなら、覆面してもいいよ。せめて、血だけは分けてやれよ」

そのまま顔を上げて、宗珀の瞳を見る。空諾は二人の様子を、黙って見つめていた。

そこへ、後ろから声がかかった。

「どうしました？」

うずくまっていた芳里までがはつと振り向く。そこに、梨環が立っていた。いままでにない厳しい目をしながら。

宗珀はまた手短に話す。

「血を分けに、つれていきたい、ということですね」

口調が冷たい。

「でも、血を与えたなら、正体はわかるでしょう？」

「

宗珀はうつ、と詰まりながらも、梨環に詰め寄った。

しかし、口を開こうとした瞬間、手で抑えられる。

「わたしは、あなたに訊いているんです、芳里。帰りたいのなら、もうここへは戻れませんよ。それでも……？」

芳里はうつ、と立ち上がった。赤くなった目をこ

すり、まっすぐ女坊の長の瞳を見つめて、

「はい。いくら気まずくても、いのちには代えられません。」

あたし、帰ります」

梨環はにっこりと笑って、芳里を抱きしめた。

「惜しいけど、仕方ないわね

認め<sup>みと</sup>めますよ。緑宝寺さま、よろしいですね？」



少し離れて見守っていた空諾は、笑いながら近づくと、芳里と梨環の肩をぼん、と叩いた。

「女坊のことに、口は出しませんよ。」

じゃこれから、ここでの思い出を消すから……」

そう言うのと、二人を離して、芳里の額ひたいに手をあてた。

とたんにその身体からだがぐったりとなる。あわてて宗珀そうはくがそれを支えた。

緑宝寺は、宗珀が娘をしつかり抱えたのを見て、

「風路まで風で行くことを許す。ゆけ！」

宗珀はさつと礼をとると、娘を抱えて消え去った。

女坊の長はふたりの消えた場所を優しい目で見つめていたが、いきなりくるり、と振り向いて言った。

「緑宝寺さま、よろしいのですか？」

にやにやと笑いながらのその言葉に、空諾はちよつと頭を掻かいた。

「消すふりしていたの、気付いてましたか。まあ、彼

女はそれほど知りませんし、ばれたらばれたときですよ。

……あまり無粋ぶすいなまねはしたくないですしね」

にやにや笑いは、さらに強くなる。

「若い子ですからねえ、ふたりとも」

十七

芳里をつれた宗珀は、全力で風を乗り継ぎ、彼女を寂に預けるとそのまま立ち去った。

彼の腕は信用出来るというのもあるが、なにより、これからまったくの他人になってしまう彼女を、これ以上見ていたくはなかったのである。

芳里を残した宗珀は、壊れた家の方に向かっていった。無駄に動き回ったつもりはないが、そろそろ風乗りが足りなくなっているかもしれない。

適当な風がないので、怪我人たちの中を歩く。さつきまでは気付かなかった暑さが、妙に増したように

思える。

「でも暑いなあ。これじゃ怪我人はたまつたもんじゃないぞ。あの火、まだ消せないのか…?」

と、その瞬間、目の前で寝ていた男がむっくりと起き上がった。

「ほのお…ああ、——が燃えている…」

びっくりした宗珀は、男の口元に耳を寄せて、炎のことを訊ねてみた。

そして、「二言三言聞き取ると、

「な、なんだって!!」

一言叫ぶなり、血相を変えて走り出した。

## 十八

緑宝寺の森の中。先ほどまで風乗りたちが行き来していたこの場所も、ほとんどの人員を運びおわつた今となっては閑散としている。そこにはただ一人これから来るであろう炊き出しを運ぶため、ぼつん

と立ち尽くす男がいた。

つい数刻前までは、脱虎門の方をちらちら眺めたりもしていたが、いまはただ辺りを見るもなしに見ているだけである。

もちろん彼は一人前の術師であるから、この役目の重要性を理解できないわけではない。緑宝寺側の要であるこの場所では、いつ何時、何が必要になるかわかったものではないからである。

とはいえ、自分だけがここですべてもぼつんとしていなければならぬというのは、なかなか納得しがたいことではあった。仲間たちはあの村で走り回っているというのに——

風乗りの印である薄い蒼の覆面を、ほどいては結び、ほどいては結び。いらいらと考えつつける彼の耳に、馴染みのある声が響いた。

「次はわしじゃ。蜀風、たのむぞ」

びっくりして声の方を見ると小さな人影。薄い緑の覆面は、どの呪役にも属さない証拠。

「成阿せいあどの、あ、あなたまで出るんですか!？」

「なんじゃ。わしでは不安かな」

曉成阿あきせいあ。

術師たちの宿敵である空魔がいつ現れるかを予見する、透形師とうけいしとして長年働いていたこの人物は、先の透形の際におのれの持つ力を使い果たし、隠居いんきょしていたはずである。

あきらかに疑いの眼差しまなざしを送る彼に、成阿は目だけでこ、と微笑みを返した。

「若い者にやできんことがあるんじゃよ」

そのまま手をぐつと握り締める老人に、かける言葉はなかった。

十九

炎の前。結界を張りつづける術師たちにも、疲れがみえはじめた。

「らちがあかん。朱崩、あの中に光雷破こうらいは打ち込んで

いいか」

爪を噛みながらそう言ったのは、いま結界張りを交代したばかりの奏壁そうへきである。

「光雷破だつて!？」

口にしてからはつとずる。自分でも恥ずかしくなるほど、呆れた声だった。

「ああ。結界で延焼えんしょうを抑えちゃいるけど、そんなに持つもんじゃないだろ、だから周りから同じ程度の力で光雷破ぶち込むんだ。そうすりゃ——」

言葉を遮さへぎって、朱崩の鋭い声が飛んだ。

「中に人は?」目は炎を見つめたまま。

「先程調べ終えました。少なくとも、生きている人はおりません」

いつのまにかやってきた庶宜が、奏壁の肩越しに答える。

朱崩は腕を組んだ。

『壁』の結界では右に出るもののない奏壁が言うのだから、術師たちの疲れがどれほどのものか、わ

かるうというものである。

先ほどの庶宜にしても、左肩にはなかば乾いた血の痕が、灰色の服を紅く染めている。

人により差はあるものの、みんなこういった状態なのである。

危険かもしれないが、いちか、ばちか…

「よし、四、五人で取り囲んで光雷破だ。四方から押し潰せ！」

鋭い言葉を受けて、術師たちがばつと散った。

期待を込めた炎をみつめる朱崩の目に、見覚えのある老人の顔が飛び込んで来た。

「成阿さま！よ、よく緑宝寺が許可を出されましてね」

門森から出て来た老人は、緑の覆面を何度も直しながら朱崩へ近づき、背伸びをしてその両肩をぱんぱん、と叩いた。

「ふむ。そうさな、今ならどんな罪でも許されそう

な気配じゃったな…ま、それはともかく。村人たちはどこかね？」

怪我をしていない村人は、病院がわりの広場のそばに集められている。朱崩がそう教えると、老人はその方向へ歩いていった。

成阿のあだ名は『風乗りいらす』である。老人らしく、のんびり歩いているように見えるが、気がつくくと一里も先にいる。

いまもその足で歩いていたが、その脇をかすめるように男が通っていった。

(あれは、たしか宗珀じゃ…)

振り向いて確認しながらも、足は勝手に前へ動く。おかげで今度は自分からぶつかりそうになった。

「わっ…とと、失礼。どうかね、寂さん」

相手はどうやら気付かなかったらしく、ゆっくりと振り向く。

「おお、ご老体。わざわざご苦労様です」

略礼のつもりか、半身<sup>はんみ</sup>をねじつたまま頭だけを下げていた。よく見ると、手は型を決めて、目の前に横たわるの老人と娘に術をかけているらしい。

成阿は礼をとると、その身体を前へ向かせ、

「体の怪我の方は頼みまず。わしは別の方でやる  
でな」

それだけ言うと、怪我人の海をゆっくりと一少なくとも本人にとつては一歩いて行つた。

「おやさん、ありや誰です？」

よつやく『転血』の術を終わつた叔が振り向くと、慶治が立つていた。

「口の利き方に注意しろよ。あの方は衝派きつての透形師とうたわれた成阿どのだ」

慶治は老人の後ろ姿を見ながら、ふん、とひとつ息をついた。

「はあ、お偉い方つてのはわかりますけど。隠居が来たつて役に立つんスかね？」

「まあ見てろ。お前よりやよつぽど役に立つ」  
寂はその場にどつかり腰をおろし、成阿の方をまぶしそうな目で見ていた。

広場のはずれには、朱崩の言うように村人たちが集まつていた。しかし、誰もかれもみんな呆けたように黙<sup>だま</sup>り、視線は何もない宙<sup>そら</sup>をあてもなくさまよっている。

彼らのそばによつた成阿は、顔についている余計な布をはぎ取りはじめた。

緑の覆面をなかばほどいたその顔は、深いしわを持つ老人の顔。落ち着きと慈愛<sup>じあい</sup>に満ちた表情を包み込むかのように、白く長い髪が垂れている。

「どうしたね」

老人ながらしっかりとした声が響いた。大声でもないのに、深く、染み込むような響きだった。

この声を聞いた途端<sup>とくだん</sup>、村人たちの表情が変わつた。老人を、まるでなにかまぶしいものでも見るかの

ように振り仰ぎ、我先われさきにと寄よって来たのである。

成阿は村人たちが自分の境遇を訴えるのを、ひとつひとつ、聞いてやっていた。

表情を変えず、余計に話すこともせず、ただ、うなずきながら……

「ど、どうなってんスカ、こりゃ!？」

慶治は、自分の目が信じられなかった。

手のつけようがないくらい、すべての氣力を失ったようだった村人たちの顔色が、目の前で見える間によくなっているのである。

寂がにやりと笑った。

「だから言ったろ、おめえより役に立つ、つてな。

よく覚えとけよ、慶治。いのちの綱なわつてのは、身体みの傷だけ治しやいいつてもんじゃねんだぞ……」

炎の回りへ散った術師たちが術の準備をしている。朱崩はそれをじっと見つめていた。

しかし、なにかひつかかる。

「朱崩」

背後からいぶかしげな声がかかった。声からして、おそらく猪虚ぶこだろう。朱崩はそちらを見ずに軽くうなずいた。

「妙だと思わないか？」

言いながらすぐ脇までやって来る。朱崩は顔を炎に向けたまま、目だけが声の主を追う。

「いや、俺達が来てからすでに十刻じふ近くになるだろ。それに結界で逃げ道みち塞ふさいでるつてのに……なんでまだ燃えてるんだらう?」

「……」

言われて朱崩も首をかしげた……心の中で、だが。

たしかにおかしい。山が火を吹いているのではな

いの中から、結界で封じ込められた炎が五刻も六刻ももつはずがない。なのに

そこへ、宗珀が飛び込んで来た。

「朱崩！ありや油だ!!」

疲れているせいか、走り方がめちゃくちゃである。とうとう石につまずいたところを、朱崩が両腕で受け止めた。

だが宗珀は、立ち上がる暇も惜しんで言った。

「村の…長に聞いたんだ…ありや、冬場のために溜めてあった油が…油が燃えてるんだよ!」

とどこどころ咳き込みながら話していたので、聞き取るのに時間がかかる。が、その意味を理解した瞬間、その場にいた者すべてが同時に叫んだ。

「なんだって!?!」

一瞬、その場を無気味な静けさが支配した。

はっと我を取り戻した朱崩が、宗珀を抱えたまま炎の方へ向き直る。

「し、しまった! やめろ、光雷破は中止だ!!」

朱崩が言い終わる前に、目の前で光芒がきらめくと同時に、地の底から炎が沸き上がり、結界の薄くなったところから炎の河となって流れ出した。

「『壁』、『殻』の結界術が使える者は、全員ですぐにあの炎を抑えろ!」

朱崩の狂ったような叫びに、術師たちが応じる。

——ただひとり、どこかへ連絡を取ろうとする者を除いて。

二十一

緑宝寺の東のあたりを歩いている男がいた。暗い森の中を歩いて行くと、竜の彫り物の入った門が見える。

緑宝寺の東の大門『招竜門』である。

男は、いつもの通り門番に挨拶しようとして…その顔を見て仰天した。

「じよ、浄芥! なんてお前さんが門番なんか…!」

倒魔術師の長はちよつと笑つて、男を中堂へと案内した。

「おや、ちようどいいところへ！」

緑宝寺中央、中堂奥の私室で着替えていた緑宝寺は、覆面を取つて訪問者を迎え入れた。

部屋へ入つた男は四十すぎくらい。小柄でがっしりとした体。かぶつていた葦あしの笠を脇にやると、後ろで縛つた長い髪が揺れる。

男は怪訝けげんそうに緑宝寺の顔を見た。

「何のはなしです……」

と、最後まで言わせず、緑宝寺はその肩を抱きかかえるようにして耳元みみもとで囁ささやいた。とたんに男の顔が驚愕きょうがくの色を成す。

「わかり申した！ すぐ行きましよう。風乗りはいませんか？」

緑宝寺は、黙つてその手を胸元にやる。男の右の眉まゆが釣り上がった。

「しかし、あなたのその術では……」

「ご心配なく、鮑采まづはんどの。『目には目を』という言葉もありましてね」

引きつったよつな微笑みを、鮑采はあえて無視した。

「それじゃ私にも、その覆面を貸して下さい」

手に持った杖を腰紐こしひもに括くりつけ、黒い布をひつたくるように取ると、鮑采は慣れた手つきで覆面を仕立てていった。

## 二十二

村の西方。光雷破によつてかえつて拡大した炎は、一向におさまる気配が見えなかつた。

術師が十数人がかりでなんとか抑えているものの、村をこね以上壊こわさず、耐え抜けるといふ保証は、朱崩にも出来ない。

朱崩自身もまた、結果維持に加わっている。誰も  
が、終わりの見えない戦いに疲れはじめていた。



41 番外一 いのちの綱

「ちつ…剛流の術がありや、水くらい作れるってのに！」

だれかが歯ぎしりとともに吐き出した言葉が、朱崩のカンにさわる。

「源流こそ最強だ！弱音を吐くなっ!!」

そのときだった。黒装束くろしょうそくに身を包んだ二つの影が、『門森』から飛び出してきたのである。

その一つ、杖を持った小柄な方は、炎のそばで印を結ぶ。

やや大柄な方は、川のわずかな水でしばらくじつと身を濡らしていた。

小柄な男は、腰だめに杖を構えて、そのまま姿勢を低くする。やがて『ヤツ』と掛け声一閃、腕は動かないが、全身から吹き出す『光』の奔流ほんりゅうは隠しようがない。

目には見えない『光』の刃が結界を突き破りやぶ、炎の両脇から斜め下へと、えぐるように食い込んで行く。

瞬まはたき一つの間、炎上する家や土全体が、まるで火をつけた団子だんじのような形で宙に浮いた。

結界をむりやり断ち切られた術師たちが、その場に尻餅しじもちを付く。

「なんて奴だ！炎を丸ごと削り取りやがった!!」

「ありや 剛烈破ごうれつぱ、それも二度いっぺんにかよ」

「ご、剛烈破ごうれつぱって…剛流の武形呪むがたのろじゃないか！」

彼らはそれぞれ驚きのあまり自分の立場を忘れ、ただ呆然ぼうぜんと目の前の出来事を追っていた。

剛烈破を使った術師は、厳しい色をたたえた目のまま、すつ、と影に消えた。

その影から、やはり黒い覆面で顔を覆おほった別の男が、すばやく飛び出した。身体は水に浸ひたされて重くなっているはずなのに、素早い動きで炎団子へ突っ込んで行く。

剛流の男よりやや高い背丈、しかしひよろひよろとした印象は受けない。男は炎の手前で立ち止まる

と両の腕を左右に広げ、中三本の指をピンと立てた体勢で跳び上がった。

わずかに紅いもやのようなものが彼を追いかけるように現れる。と、やがてそのもやは上へ上へと昇ってゆき、それにつれて彼も押し上げられたかのように昇ってゆく。

「朱雀変化か!」

誰かが素つ頓狂な声を上げた。……いや、この反応は正しい。そう朱崩は思った。なぜなら――

朱崩は内心で、苦い思いを嘔み殺していた。口をつく言葉は、それでもやはり冷たい。

「いや、翔炎翼だ」

朱雀変化、翔炎翼、いずれも、源流の術ではない。しかし、すでに自分に手が無い以上、静観せざるをえないのである。

「どつちにしたって、無茶苦茶だぜ」

その通りだ、と朱崩は考えた。風も使わず、空中を行く。こんな術があつていいものか!

なかば八つ当たりである。

そんな思いをよそに、黒覆面の男はさらなる術を使った。…いや、正確にはすでに使っていたと言つべきなのだが

まず気付いたのは宗珀だった。件の紅いもやから、さらに紅い筋のようなものがスツと一本、出ているのである。その源は、と追いかけてみると、黒覆面はいつの間にか片腕をおろし、その手になにやら細い剣のようなものを持っている。かの紅い筋は、ここに発していた。

鳥の形をした柄。剣は鳥のくちばしから、吐き出すように伸びている。

「朱雀…宝剣――」

朱崩はすでに声もなかった。

すでに滅びたはずの衝派極流、そのなかでも随分と以前に失われた剣が、目の前でその威力を發揮しているのである。

朱崩は、自分の中できが崩れて行く音を感じ

ていた。

黒覆面はそのまま、炎団子をぐるりと一周しながらほぼ真下に着地する。次第に迫る紅い珠の方へ剣を向けて、ヤツと掛け声一つ。珠はとたんに紅蓮の膜で覆われた。

「炎を、閉じこめやがった」

「一人でやるんじゃ、すぐ耐えられなくなるぞ」

「そんな気はないだろう。おそらく…」

朱崩がつぶやく。力のないその声色に気付いた数名がはつと振り向く。だが、彼はそれ以上口にしな  
い。いや、口にできないのだ。それは、彼の今まで  
の言動を否定するに等しい。

そんな思いかかわりなく、術は進む。

剣に左手の三つ指を添えるように置き、炎の珠を受  
け止めるように構える。

朱崩がはつとした。

「全員、炎を見るな!!」

そう大声で叫ぶと、自分は目の前に腕をかざし、目  
を細くしてその瞬間を待っていた。

「極熱破あッ!」

黒装束の男が叫んだ瞬間、凄まじい光が生じた。

それが静まったとき、目の前にはただ黒い焼け跡  
が広がるだけだった。…そう、そこには、あれほど  
大きかった炎が跡形もなく消えていたのだ。

あちこちで赤黒く光る燃え残りだけが、それが夢  
でないことを教えてくれる。

そして、その燃え残りさえも、突然の霧に黒く染  
まって行った。

朱崩はもう驚かなかった。

ゆっくり振り向いた先から、その霧は流れていた。

『門森』である。

そこでは、おそらく霧を起こしたのであろう術師が、  
右手に杖を持ったまま軽く一礼すると、剣を持った  
男と共に門の向こうへ消えて行くところであった。

「なん…だつたんでしよう、いまのは？」  
 しばらく、だれもが呆ぼろけていた。延焼を防ぐはずの結果が見当違いのところ、に張られていることが、そのよい証拠である。

「火で、炎を打ち消したんだ」

それはもつ答えと言つより、自分に言い聞かせていると言つてよかつた。

「そして、あの霧…あれは、森の木々から、水みづ気を吸い出したんだ。たしか、剛流にあつたと思う」

「そこまで、魂が抜けたような声で言っていた彼は、はつと我にかえつた。

「さあ、後片あとかたづ付けだ。家を立て直して、煮炊にたきができるようになるまで終わりはないぞ！」

おうつ、と応じる術師たちが頼もしく思える。

大まかな指示を各部隊の長に出したあと、朱崩しゆぶはふ、と門森を見た。

そして、頭かぶを垂たれる。

「わかりました。私の負けですよ、緑宝寺」

「緑宝寺さま…」

奥堂の椅子いすにもたれて眠っていた空諾が目を開けると、扉の前に女坊の長が立っていた。

「やや、なにかありましたか？」

梨環うしろは後手で扉をもてあそびながら、

「いえ、何やら急いで飛び出して行かれましたので、気になりました…」

緑宝寺は妙な顔でそれに応える。

「おや、私はここを動いていませんよ」

「気のせいですか。では炊き出しの仕上げに参ります。けどそのまえに——」

緑宝寺さま、髪かみが焦こげておいですよ」

そう言つて悠然ゆうぜんと笑つ彼女を見て、空諾は頭かを搔かいた。

「やつぱり、かないませんね。とりあえず、みんなには内緒ないしょですよ」

笑いながら部屋の扉を閉める。その影で、男が三人ばかり立っていた。

「と、いうわけですって」

男の一人が、中に聞こえないように笑った。つられて残りの二人も笑いだす。

「まあ、いいじゃないか。あの人も『粹流』で懲りてるんだよ」

「そつだな。とにかく、緑宝寺のことを想っているって点じゃ、誰も勝てやしないし…」

「じゃ、これからも知らんぷりということだ」

全員がうむ、とうなずいた。その拍子に中堂との扉が開く。その明かりに浮かび上がった顔は、仙跳、浄芥、杯岱——すなわち、最高師範たちであった。

—終—

注

- 一 一刻：当時の一刻は、約15分
- 二 二百五十里：当時の一里は約540m
- 三 二丈：当時の一丈は約3m